

以上が本書に収められた諸篇のあらましである。大著の紹介としてはまことに粗末なものに終始してしまい、猫の子を描くことすらできなかった。かてゝ加えて、論旨を取り違えていないやも料られない。蕪難なる紹介に惑わされることなく、一度は本書を手にとつていただきたい。得る所、極めて大なるものがあること明らかである。

A4、本文四二六頁、昭和三十八年二月
東洋史研究会発行、価一七〇〇円

(滋野井)

自我と無我

—インド思想と仏教の根本問題—

中 村 元 編

人間は生きているかぎり自我の觀念をもつていて、それが人間の行動を裏づけているのであるが、その根底に横たわる真実なる「自己」とは一体何であるか？この問題に真正面から対決した諸学派によつて、我（アートマン）が説かれるに至つた。しかしこの自我の觀念はときと

して「我執」ともなつてあらわれる。この点から対決し「我執」「我所執」を捨てるべきであると極力主張したのは仏教の無我説であつた。本書はこういつた問題を体系的に論じたものであり、わが国の東西諸大学における第一線の学者達がそれぞれの専門分野を担当してあらゆる角度から検討している。序論（中村元）は仏教の無我説そのものがどのような立場にもとづいて成立したか、またインド一般の私の思想とどのような関係をもつかを論じたものである。第一部は、インド思想におけるアートマンの問題について、古ウパニシャッド（高崎直道）、ジャイナ（宇野惇）、サーンキヤ（山口恵照）、ニヤーヤ（宮坂宥勝）、バガヴァッド・ギーター（原史、イーシュヴァラ・ギーター（瓜生津隆真）などの多方面から論じ、また宿命論、無因論、有神論に対する仏教の批判（雲井昭善）も載せられている。第二部はいわゆる仏教の無我説について、無我と主体（平川 彰）の問題を初めとして、ミリンダパンハ（早島鏡正）、俱舍論（桜部建）、中論（梶山雄一）、唯識（勝呂信静）に出ず

る無我説がどのようなものであるかを詳しく論じている。また、真理綱要（Tattvasaṅgraha）に出ずる「ミーマンサー、サーンキヤの私の思想（服部正明）」も載せられている。第三部はアートマンと西洋哲学との比較にまで言及し、古代中世（川田憲太郎）と近世（玉城康四郎）の哲学との両面から「我」の問題を検討している。

こうした「我」の問題は、仏教思想を正しく把握するために是非とも必要であり、今迄にも度々研究がなされてきたが（本書巻末「私の問題に関する研究文献」参照）、今度のように多数の一流学者が、あらゆる方面から検討し、巧みにまとめた書は珍しい。今後の学界に寄与するところも大きいと思う。

A5版、本文七一九頁、昭和三十八年
六月刊、三〇〇〇円 平楽寺書店

(舟橋尚)